失われた都市を求めて
－中国映画『長江哀歌』を読む－

北陸大学未来創造学部准教授
村田　和弘

・『赤壁』と『長江哀歌』

2008年に日本公開された『レッド・クリフ』という国際合作映画が人気のようだ（筆者はまだ見ていないが）。『レッド・クリフ』とカタカナで表記されると何の映画か見当がつかないが、英語で“Red Cliff”と書かれれば「赤壁」の英訳であることが了解される。つまりこれは中国古典白話小説『三国演義』で描かれるところの赤壁の戦いを映画化した作品だ。『三国演義』における関連部分のストーリーを紹介しよう。魏の南方攻略をうけ呉政権は魏との和平か抗戦かの選択を迫られる。和平派が優勢であるが、そうなれば劉備軍は拠点と頼む荊州を失い滅びること必定。そこで諸葛孔明が若き周瑜に曹操の狙いは呉の二喬であると焚き付ける。二喬の一人、小喬は周瑜の妻に他ならない。周瑜は孔明の策略に協力し、曹操率いる水軍に長江中流の赤壁にて決戦を挑む。劉備にとっては必死の戦だが、呉政権にとっては和平という選択肢もあり、敢えて劉備と協力する必要はないのだが、そこを協力させたところが孔明のしたたかなところである。決戦で火攻めにする手はずは整うが、肝心の風向きがその季節は長江北岸に陣取る曹操軍側からしか吹かない。そこで孔明は魔術者の如く七星檀で祈祷を行う。すると風向きが東南に変わり、火攻めに成功して曹操水軍を焼き払う。曹操は敗走、華容道で関羽の義に篤い心情に訴え、からくも命拾いし、ここに三国鼎立の大勢が定まる。だれもが知る小説の一幕をコンピュータ・グラフィックと人海戦術を駆使して如何に映像化するかがこの映画の見どころだ。監督は呉宇森ジョン・ウー。キャストの金城武（諸葛孔明）や梁朝偉トニー・レオン（周瑜）は香港映画でお馴染み。曹操役の張豊毅は陳凱歌の『覇王別姫』で張国栄レスリー・チャン扮する旦（女形）の相方として出演していた。他の張震（孫権）や林志玲（小喬）も華流スター。『赤壁』が目指したのはオールスター・キャストによる中華ハリウッド映画だ。

ところでここで紹介したいのは『赤壁』という娯楽大作ではない。そうではなく、やはり長江中流に位置する、いやもはや「位置した」と過去形で語るべきであろうが、奉節県という小都市を舞台とした『長江哀歌』という映画である。この二作は、ほぼ同じ地点の長江沿岸の物語であるが、片や古典小説を描く娯楽映画であり、片や今のリアルを描くアート映画である。この対照的な二作のうちの後者を紹介してみたいのである。

監督の賈樟柯ジャ・ジャンクー（Jiǎ Zhāngkē チア　チャンコー）は1970年、山西省汾陽市の生まれ。出世作『プラットホーム』（2000年）では舞台を生まれ故郷の汾陽に置き「喪われた青春」[※1]を描いた。『長江

※１：藤井省三『中国映画　百年を描く、百年を読む』岩波書店、2002年７月より、第３章・１「小都市の喪われた青春『プラットホーム』」を参照。賈樟柯については多くを本書から学ばせていただいた。

哀歌』は2006年製作の中国映画で、2007年の日本公開。ストーリーは山西から奉節県へ来た別個の男女のそれぞれの夫婦の再会と離別の過程が組み合わされて構成される。賈樟柯監督が今回、舞台とした奉節の町とはいかなる場所なのであろうか。

・奉節という町

まず奉節と赤壁古址との位置関係から見てみよう。赤壁古址は湖北省武漢市西南、現在は赤壁市となっているあたりであろうと推定されているが、そのすぐ上流に湖北省宜昌市という都市がある。その宜昌市から奉節県にある白帝城の山麓までの区間、長江は狭い峡谷の連続する地形になる。すなわち古来より景勝地として名高い三峡である。三峡と総称される３つの峡谷は奉節県側から見て瞿塘峡、巫峡、西陵峡の３つを指す。三峡の船下りは中国観光の目玉の一つであった。

奉節は四川省に属する県であったが、1997年に重慶が直轄市に昇格するのと同時に四川省から分離して重慶市の行政区画に属することとなる。奉節県の基礎的データをやや古くて恐縮だが『中華人民共和国行政区画簡冊2004』※2に徴して見てみよう。直轄市となった重慶市の行政区画単位には市轄区15、県級市４、県17、自治県４が割り振られており、奉節は17ある県のうちの一つである。重慶市全体での人口は3,114万人、面積は8.23万平方キロメートル、そのうち奉節県の人口は98万人、面積は4,087平方キロメートルである。ちなみに石川県の2008年のデータ※3では、県全体での人口が116万８千人ほど、面積が4,185平方キロメートルであるから、奉節県の人口、面積の規模と石川県のそれとがほぼ同程度であることがわかる。ただし県とは言っても、中国の行政区画単位では、県は県級市より下の単位であるから、日本で言えば市の下の、町や郡に相当するのであるが。

さて重慶市の直轄市への格上げが批准されたのは、1997年３月、第８回全国人民代表大会（全人代）第５回会議においてであったが、その理由は三峡ダム建設プロジェクトとダム区住民を移民させることの統一的計画、準備、管理に利するためであった。

いったい三峡ダム建設というのは、孫文、毛沢東、鄧小平などといった中国を築いてきた権力者が常に実現を夢想してきた、現代中国が克服すべき課題の一つであった。長江の水運能力の向上、洪水予防そして電力供給のため長江にダムを建設することの必要性が語られることが多いのだが、もう一つ理由を挙げるとすれば、治水事業の成功が権力者の正当性の担保となってきた歴史を中国が有するからでもある。本映画にしばしばテレビ画面が映りこみ、上の３人の指導者のニュース映像が流されているが、これが現代中国の抱いた夢想の結実であることを知らせている。

ダム計画は文革により頓挫するものの、80年代、改革開放の時代を迎えてその必要性を増した。上海を窓口とする長江中流域の生産基地化が進み、また急速な近代化に伴う全国的な電力不足が深刻さの度合いを増し続けた。そうした状況から1992年４月、第７回全人大第５回会議において三峡ダム建設プロジェクトがついに承認され、1994年12月に正式着工となる。

ダム本体の建設地は湖北省宜昌市三斗坪とされた。この三峡ダム建設は賛否の論議を巻き起こしたが、その要因として、環境破壊と並んで、ダム建設により堰き止められた長江の流れが三峡区間の水位を上昇させ、沿岸に点在する都市と名勝古跡を水没させてしまうということがあった。三峡の西の起点である奉節県は都市そのものの水没が予定された。そのため100万規模の住民を外地へ移民させ、都市を人為的に破壊する必要が生じた。都市再開発のため建物を取り壊すことを中国語で「拆 chāi」というが、

※２：中華人民共和国民政部編、中国地図出版社、2004年３月。
※３：『石川県ホームページ』内にある石川県の概要を参照。アドレスは以下の通り。http://www.pref.ishikawa.jp/gaiyou/

言ってみれば奉節は町全体がダムのために「拆」されることになったのである。

観光資源となるべき文化遺跡の水没と人権を無視した移民計画とが大きな反対を招くなか、重慶市の直轄市昇格と機を一にして、1997年第二期建設工事が開始される。翌98年には「百年に一度」の大洪水が発生。2002年11月、奉節の町は爆破され、2003年５月第二期建設工事が完成、水位の135メートルまでの上昇の準備を終えた。すぐさま第三期工事が開始され、2006年５月、水位を156メートルまで上昇させることを決定。同年９月、水位の上昇により奉節はほぼ水中に没し、山頂にあったはずの白帝城はいまや水面に残る孤島の上にその姿を見せている。2008年11月現在、水位上昇はすでに156メートルを越え、172メートルに達している。2009年にダムは完成予定だが、完成後の最高水位は175メートルである※4。

このようにダム水位を時系列に並べ、そのなかに本作が撮影された2005年の奉節を置くと、画面に収められた映像の意味がわかってくる。画面の町はどこも瓦礫の山で、廃墟と化したビルや工場が点在する。ビルを取り壊すため人夫の振り下ろす槌の音が常に画面から聞こえてくる。主人公がはじめて奉節の市街地へ入るシーンでは、半壊のビルの壁の中段くらいのところに赤い字で「156.50M　三期水位線」と書かれている。映画撮影のすぐ翌年には第三期工事により、ここまで水位が上昇することを示すものだ。画面を通して、町が居住不可能になることを端的に語りかけている。

映画の中の奉節は、町全体が水没に向かう死に瀕した町であり、100万もの住民の大部分が上海や広東へ移住し、「拆」という印を付けられた建物が順次取り壊されていく破壊の過程にある町である。『長江哀歌』は、失われてゆく短い時間を生きた都市の記憶である。実際、賈樟柯はインタビューで本作を撮影する動機を次のように語っている。

> 2005年のとき、わたしの親友で、中央美術学院教授で、中国で著名な画家でもある劉小東が、三峡へ行き11人の解体作業員を描き、『三峡温床』という題の大きな油絵を描くというので、わたしは丁度彼の仕事を紹介するドキュメンタリー映画を製作していたので、それならば、ということで彼の仕事のために三峡まで行ったのです。その結果三峡に行くや、わたしはすぐにこの町でストーリーのある映画を撮るべきだと感じたのです。三峡全体で起こっている状況、歴史ある県城、2,600年の歴史のある古い町が、２年という時間で取り壊され、さらに100万の人がこの土地から上海、広東、遼寧といった場所へ移民して行き、巨大な移民がそこにいるのです。それでわたしは三峡が中国で頻発している社会変化を集中的に示していると感じ、そこで映画を撮影することを決めたのです※5。

ドキュメンタリー映画から急遽、ストーリー映画に変更したが、その理由が、奉節という町を呑み込む変化が中国の縮図であることに気づかされたからであったことが、ここに監督自身により明白に述べられている。

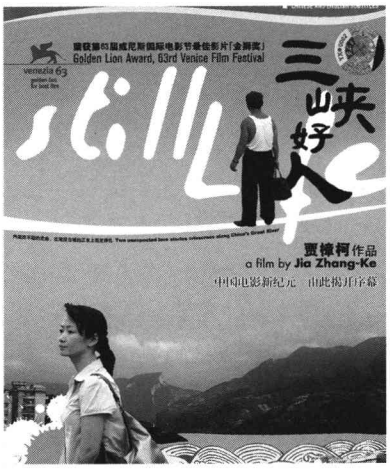
・原題『三峡好人』の含意

邦題を『長江哀歌(ちょうこうエレジー)』とする本作の原題は『三峡好人(サンシア・ハオレン)』という。

※４：三峡ダム建設プロジェクト及び進行過程における水位上昇のデータについては、インターネット上の新聞記事を多数参照した。ここには主なものだけ挙げておく。『新華網 湖北頻道』「三峡工程建設大事記」(2006年５月18日)、「重慶奉節老城成功起爆」(2006年５月16日)、『sina　新聞中心』「三峡工程建設大事記1919～2006年」(『新華網』より、2006年５月16日)、「三峡水庫成功実現156米蓄水目標」(『新華網』より、2006年10月27日)、『商都頻道』「三峡水庫水位持続上升 奉節老城今日将被淹没」(2006年９月25日)、『天天新報』「逼近175米水位、三峡工程年底全部建成」(2008年11月10日)など。アドレスは省略。

※５：NHKテレビ『中国語会話』2007年９月のインタビュー紙上再録に掲載された賈樟柯のインタビューによる。日本語訳は筆者の判断で適宜変更した。

「三峡に生きる普通の人々」というほどの意味だ。英文タイトルの“Still Life”（まだ生きている）の方がそのような意味合いを示し得ている。筆者が中国滞在中に購入したDVDのパッケージは英文タイトルの下に線が一本引いてある。これが単なる英文サイン風のデザインでないことは、その線の上に主人公の男性の後姿がコラージュされているのを見ればわかる。その線は奉節の町の両岸の山並みと長江の水面と空を遠景に収めた写真の上に置かれており、ちょうど峡谷に掛けられた一本の綱のように配置されている。主人公の男性がこちらに後姿を見せ、中空に張られたロープの上に“Life”のiの字になるように立ち、向こうに見える奉節の町を眺めているという構成だ。この画面構成は、映画の最後のシーンを踏まえている。主人公が奉節の町を立ち去る途中、ふと見上げると、廃墟と化したビルの間に張られたロープを雑技のように竿でバランスを取りながら綱渡りしている男の姿を見かける。訝り周囲を見回すが誰も気に止めていない。主人公も再び前を向き、歩みを進め、映画は暗転して終わる。この「綱渡り」のシーンについて、賈樟柯は次のように語っている。「映画のラストのシーンは綱渡りです。綱を渡るというのは、中国ではごく普通の比喩です。中国人は、危険だが歩いてゆかねばならない人生の道程を、一般に「綱渡り」といいます。こんな風に、「おい、綱渡りはやめろ」とか、あるいは「綱を渡ってみようか」とか言い、危険を冒しても、生きていくという意味です。だから最後のあの綱渡りは、そのような中国語の用語の翻訳なのです」[※6]。邦題はこうした含意を汲み取れ切れておらず感傷的過ぎるのが残念だ。



（中録華納家庭娯楽有限公司
ISRC CN-A12-06-0386-0／.V J9）

・失われた時間を取り戻す旅

本作には、制作の事情からか、プロの俳優はほとんど登場しない。主人公の韓三朋を演じた趙濤が『プラットホーム』で馴染みがある程度だ。物語は、妻と自分の娘に会うため、妻の親族を訪ねに、船に乗って韓三朋が奉節の町へやって来るところから始まる。この町が奉節であり、韓三朋の乗った船が上海の崇明島との間の移民連絡船であることは、船のアナウンスで「崇明島へ向かう移民のみなんさんに申し上げます、奉節港より出発する崇明島行き客船は乗船準備中です」と流れることから判明する。奉節から出てい行く移民とは逆方向に、奉節へやって来た異邦人という設定だ。韓三朋の異邦人性は言葉にも表れている。韓三朋の言葉は普通話で聞き取れるが、現地の住民の話す言葉は四川方言であるのか聞き取りづらい。だが現地の住民には韓三朋の話す言葉が「没听懂」（聴いて分からない）であり、しばしば会話が成立しない。言葉の違いが韓三朋の外地人であることを浮き彫りにする。韓三朋は妻と16年あっておらず「四川省奉節県青石街５号」という1997年以前の住所しか知らず、奉節が爆破され部分的にすでに水没していることも知らない。はじめバイク・タクシーでその住所へ行くが、指し示されたのは川の底であった。そこでバイク・タクシーの若者の提案で「拆迁办」（取り壊し・移民事務所）で移転先を調べるがパソコンがフリーズしてしまう。その若者の案内で、ある宿屋に投宿することとなるが、もちろん主人と若者は裏で取引がある。宿屋の主人との会話でその住所は麻老大の家で、今は６号埠頭の「囤船」（貨物輸送船）に居ることを知る。妻は麻老大の妹である。麻老大に会うも、妻は宜昌へ船で行っていて

※６：※５と同じ。

不在、娘のことも知らないという。そのときの２人の会話から、妻と娘は公安局が重慶へ連れ戻したものであることが明かされる。滞在して妻の帰りを待つため、韓三朋は宿屋の客の一団との会話から取り壊し作業員の給料が１日５、60元になることを知り、作業員として働き始める。作業場を仕切るおばさんとの会話から、おばさんの子供が娘の同級生であることが分かり、また宿屋で出会った周潤発チョウ・ユンファ好きの青年、小馬哥との会話から、韓三朋の妻は３千元で買った人身売買婚であること、公安局が救助に来たとき、妻が娘をどうしても連れ帰るといってきかなかったことなどが知られる。小馬哥と携帯番号を交換したが、韓三朋の呼び出し曲は『好人一生平安』であった。それを聞いた小馬哥は「まったく、まだ好い人なんているものか。今やご立派な奉節のどこに好い人なんているものか」と吐き捨てる。

本作では、韓三朋が誰かを訪ね、誰かと会話することで物語が生まれる。主人公が旅をしながら人との出会いを紡いで行くロード・ムービーのような枠組みで構成されているのだが、本作がロード・ムービーと違うのは、韓三朋が各種の人々に対して行うインタビューの会話で物語が語られているところだ。韓三朋が自身を語るときも小馬哥のインタビューに答える形を取っている。このようにインタビュー形式のドキュメンタリー・タッチで奉節に生きる人々が描き出されるよう撮影しているのが特徴といえる。

本作にはもう１人、女性の主人公が登場する。女性はやはり山西から夫を捜しに奉節へやってきたのだ。夫とは音信がなくなり、奉節の携帯番号の桁数が重慶市になって１桁増えた後の新番号を知らないほど疎遠になっていた。女性は前漢墳墓の発掘調査を行っている夫の弟とともに夫捜しを始める。探すうちに夫が奉節の町の取り壊しを中心となって請け負っていること、またアモイの女社長と関係があるらしいことが徐々に分かってくる。翌日、夫と再会した女性は長江の堤防へ下り、ダンスを１曲踊った後、夫に離婚を申し出る。新しい相手が宜昌で待っており、そのまま上海へ行くつもりだと伝える。夫も、それはいいことだと同意し離婚が成立する。

女性のエピソードは、夫を山西で待つことで失われた時間を奉節で取り戻すための旅である。夫の弟の部屋の壁に時計ばかり掛けられている場面があるが、時間を意識せざるをえない。彼の仕事が古墓の発掘であるのは、水没する遺跡の調査を反映しているが、文字通り時間を掘り起こすものでもある。夫捜しのシークエンスの別のカットで、奇妙な形をした廃墟ビルの映像がしばしば映り、そのビルが飛び立つシーンがこのシークエンスの最後に挿入されている。韓三朋の妻捜しのシークエンスからこのシークエンスへの転換部にUFOのCGが挿入されていたのがこのビルであったかと思い当たるのだが、さらによくよく見れば、この廃ビルの形がどうやら「奉」という漢字を模しているように見える。だとすれば、この廃ビルの飛翔は、奉節から解き放たれた女性の時間の象徴であるといえよう。

そしてこの推測が正しいならば、UFOを目撃した韓三朋の時間は奉節と繋がることで取り戻されることになる。その後、映画は再び韓三朋の物語へと戻る。麻老大の船を訪ねに行っている間に小馬哥はビル解体の下敷きとなって死んでしまう。死ぬ直前に「大白兎」という名の飴を配るのだが、これは上海の特産品として有名だ。その後、麻老大から妻が帰ってきたという連絡を受け、船に会いに行く。妻との会話により、娘が広東省東莞市に出稼ぎに行っていること、今の夫があまりよくないこと、奉節へ戻ろうとしたときのことなどが語られる。船の２階へ上がり、韓三朋は今の夫との会話で「妻を連れて帰りたい」と申し出る。だが妻は妻の兄の借金３万元の質として今の夫のところへ遣られたものであった。韓三朋は「１年待ってくれ、あんたに金をやる」と答える。夫婦２人は小馬哥の残した「大白兎」を分けあって食べる。韓三朋は金を作るため山西へ帰ることにする。宿屋の一団も、山西の石炭堀の仕事は命懸けだが１日２百元稼げると聞き、話に乗る。翌朝、男たちは奉節の町を出て行く。

賈樟柯の映画はアート系中国映画であるが、監督自らが「中国の縮図」と言うように、奉節という現在

進行形の舞台を通して、決して声高に批判を叫ぶのではなく、鋭く時代を抉り取る感覚に溢れている。なによりも本作により2009年には水没してしまう歴史ある町の2005年当時の瓦礫の山と化した様子に愕然とし、そして相変わらず美しい三峡の峡谷の実際の風景を随所に目にし得るところがうれしい。そこを舞台に時間を取り戻し新たな道を歩み出す２人の姿を淡々と描く賈樟柯の手腕は巧みである。また要所に当時の流行歌を挿入し、その歌詞と物語をシンクロさせる手法も『プラットホーム』ゆずりで楽しめる。賈樟柯は本作で2006年ヴェネチア映画祭の金獅子賞グランプリを獲得した。